

伝統的工芸品産業事業者の 魅力を伝える 知的資産経営報告書

～伝統的工芸品産業事業者の魅力とそれを支える知的資産を明らかにする～

株式会社九谷作田

2011年3月発行

INDEX

1. 当社の代表製品	1
2. 当社の概要	2
3. 伝統的工芸品産業の歴史や当社のこだわり	3
4. 当社が提供する価値とそれを支える知的資産	4
5. これからの挑戦	5
6. 代表者からのメッセージ	5
7. 作成支援士業コメント	6
8. 知的資産経営報告書とは	7

1. 当社の代表製品



2. 当社の概要

■ 経営理念

座辺常用の食器を創る ～温故知新と陶器の基本を守り、これまでに無い食器に挑戦する～

■ 当社の特長

● 使い手に近づいた販売

当社は、作品の特徴を伝えたり、使い手にあった食器を提案するために、対面販売を重視しております。専門店や雑貨屋等に販売する場合でも、販売担当者との対話を通じてお客様や作品についての情報交換を行っております。

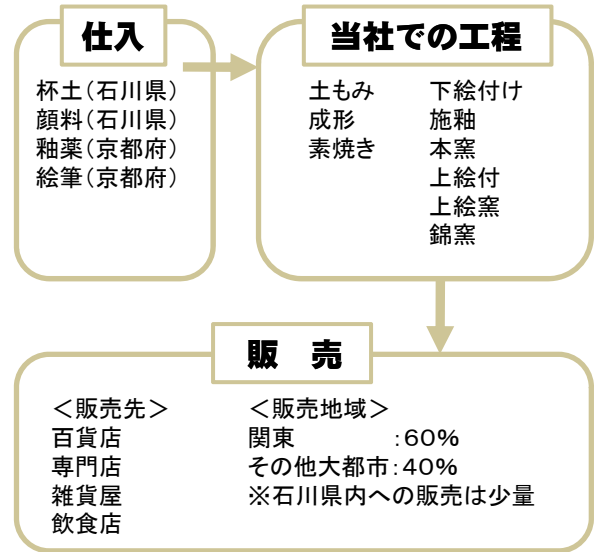
● 少量多品種生産

当社の商品は1,000種類近くあります。お客様の多様な要望に応えるために多くの品種を揃えるようになりました。また、当社は手作りであるため工業九谷では困難な小ロット生産が可能であり、差別化要因となっております。

● 統一感のある作品

当社は他の工房とは異なり非分業体制を採っているため、統一感が高い作品を創ることができます。他の工房は成形担当や絵付け担当等が異なることがあるため、生地質感と絵柄の質感の間で統一感が高まらない場合があります。

■ 当社のビジネスモデル



■ 企業概要

【代表者】 秦 耀一
【住所】 能美市大長野町チ 102
【業種】 陶器製造業
【資本金】 10,000千円
【従業員数】 14名

■ 沿革

昭和24年 作田良一が創業する。
昭和45年 有限会社九谷作田に法人成りする。
昭和47年 株式会社九谷作田に改組する。
平成 5年 秦が代表取締役役に就任する。
平成 7年 ろくろ場を新築する。




■ 連絡先

TEL : 0761-57-0689
FAX : 0761-58-5231
E-Mail : seiyo@poem.ocn.ne.jp
担当者: 秦耀一

■ アクセス



3. 伝統的工芸品産業の歴史や当社のこだわり

起源や歴史	隠れた(見えにくい)技術	(表面に)現れた技術	伝統工芸品
<p><古九谷> 1655年頃大聖寺藩領内の金山で磁鉢が発見されたことを機に、初代藩主前田利治が後藤才次郎に肥前有田で製陶を学ばせたのがはじまりです。しかし、1730年頃、突然窯が閉められました。</p> <p><再興九谷> 古九谷の廃窯から約80年後、加賀藩営で金沢に春日山窯が開かれ、それを皮切りに数々の窯が加賀地方一帯に開かれました。</p> <p><今九谷> 明治以降、九谷焼は九谷庄三の彩色金襴手が有名となり、主要輸出品になりました。</p>	<p><水鉢・杯土> 産地では、特に手捏ね用の素地土を製造する職人が減少傾向にあり、希少価値は高いです。</p> <p><土もみ> 各窯では、この工程から九谷焼の製造をはじめることが多いです。</p>  <p>石川新情報書府 http://www.shofu.nsk.ne.jp/</p>	<p><工程> 九谷焼が姿を現し始めるのは、<u>成形</u>からです。その後は、<u>素焼き</u>→<u>下絵付け</u>→<u>施釉</u>→<u>本窯</u>→<u>上絵付け</u>→<u>上絵窯</u>→<u>錦窯</u>の工程を経て完成します。</p> <p><上絵付・上絵窯> 九谷焼を特徴づける工程は、<u>上絵付</u>と<u>上絵窯</u>です。未発色の絵の具で図柄模様を描き(上絵付)、焼成することでその未発色の図柄模様がガラス質の美しい五彩に変貌します(上絵窯)。</p>	  <p>石川新情報書府 http://www.shofu.nsk.ne.jp/</p>

■ 当社のこだわり



- ①土ごろし: 芯を出します。
- ②ろくろ成形
- ③成形型イロイロ
- ④ろくろ成形後、湿度のある室(むろ)でゆっくり乾かします。
- ⑤鉋がけ: 高台をつくります。
- ⑥たたら(スライスした粘土)成形後の口処理
- ⑦素焼き後の素地
- ⑧下絵付け
- ⑨上絵付け
- ⑩上絵付け済、上絵窯待ちの商品

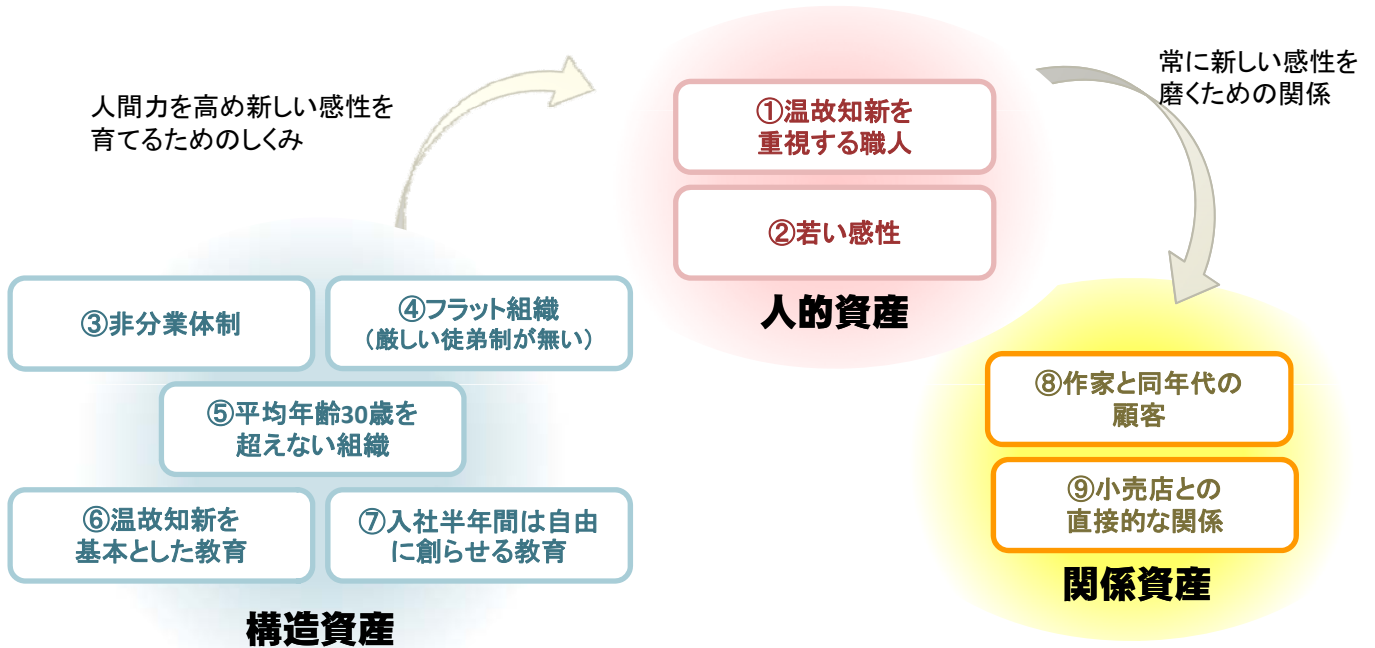
創業当初より温故知新を大切にものづくりを進め、その時々に使われている食器より一歩先んじた器を創り続けようと考えております。所属作家の人数は十名前後を守り、少量多品種の品物づくり、それに叶ったものとして手づくりを基本としております。

4. 当社が提供する価値とそれを支える知的資産

■ 当社のこだわりはなぜ形成されたの？（過去から現在の価値創造のストーリー）

技術ではない強み	古きよきを訪ね、学ぶ	若者の人間力を高める学校
<p>現社長の秦が九谷焼の業界に入ったのは27歳の時です。当時は、10歳代の頃から修業をはじめたロクロ師や絵付け師等が大勢おりました。</p> <p>彼らの技術は、全くの素人であった当時の秦から見たら神業その物です。秦は、20歳代半ばから技術的に彼らに追いつくことは不可能と思い、技術ではない強みを追い求めるようになりました。</p> <p>創窯当初のメンバーは、商社の営業、友禅職人、電子工学専攻の新卒者、左翼運動家等多様な者達ですが手先の技術的には素人集団でした。</p>	<p>秦の師は、「作品の神髄は古き良きものの中に無限にあり」と常日頃お話しされてました。三百年、五百年、千年と時を経て今でも大切にされているものの中から、技、形、釉等を学びとることこそ、良い食器を創るために重要なことであると知りました。</p> <p>秦は、白黒の図鑑では確認できない色合いを確かめるために美術商のもとに足しげく通い、古き良きものから多くを学びました。手先の技術力ではなく、古き良きものを学び、それを活かした食器創りを可能とする感性を磨きました。</p>	<p>創窯当初の多様なメンバーの共通点は、「食べること」と「古き良きものが好き」ということでした。また、各々人として魅力的でした。</p> <p>いい作品は人間力の高い作家から生まれます。いい作品を世に送り出すためには、作家の人間力を高める必要があります。人間力が伸びるのは若い世代、その時代のトレンドをつかみ易いのも若い世代です。秦は、若者の感性と人間力を高めることに力を注ぐようになりました。「古きを教え、新しきを創造せしめる」九谷青窯学校のはじまりです。</p>

■ 当社のこだわりはどのような人や仕組みで支えられているの？



【提供する顧客価値】

古き良きものを基本としつつも、これまでにない図柄模様を施し、料理と調和し、愛でられる普段使いの食器～座辺常用の食器～を提供すること

秦がこれまで築いてきた土台(①)の上で、若い従業員(②⑤)が人間力を高め、新しい感性を取り入れるために日々学んでおります(④⑥⑦)。古き良きものを秦や自ら学んでいることや(④⑥⑦)、従業員の更新代謝により(⑤)企業として衰えることのない若い感性(②⑤)によりこれまでにない図柄模様を提案しております。また、同年代のお客様(⑧)やお客様を良く知る小売店(⑨)との会話を通じ、ひとりの作家の感性(③)をもって意匠から成形、絵付けまでを行い、「愛でられ、日常的に用いたくなるような食器」を提案いたします。

※文章中の番号は、上図の知的資産を意味します。

5. これからの挑戦

- 当社は常に進化します。(未来の価値創造のストーリー)

地産をまもる

石川県の九谷焼業界では原石の確保が急務として叫ばれていますが、原石を杯土にする事業者の活性化も大切なことと考えられます。近年、事業者の廃業により石川県内で九谷焼の創作に必要な道具等を揃えられなくなりました。

原石を守り、作家を育て販売するだけでは業界を振興させることは困難です。九谷焼の創作に関わる全ての段階に対して、皆様で支え合える仕組みを構築することが重要かと考えており、当社もその一助となる取り組みを検討します。

手作りを守る

五年、十年先を見れば、消費者が減少し続けることが確実なことです。また、普段の衣、住、器等において、工業製品を中心として快適に過ごそうと思えば十分豊かに暮らすことが可能です。そのような現状の中、「手」でつくられたものが如何にして存続し続け得るか、如何にして「手」でつくられたものが価値を高めるのかについて追及して参ります。

新陳代謝を止めずに若い感性と人間力を高める

当社の特徴のひとつとして、従業員の平均年齢を常に30歳代前後に保っていることがあります。工房の親方が年齢を重ねると技術も良い弟子も多く育ちますが、その時々トレンドをつかむことは困難です。また、工房に付くお客様の年齢層は親方の年齢に近いということからも、親方の年齢とともにお客様も年齢を重ねます。時代のトレンドは変わります。組織もそれに併せて新陳代謝することが重要です。当社は今後も新陳代謝を止めずに若い感性を取り入れ、彼らの人間力を高めて参ります。

6. ～代表者からのメッセージ～



有名私立大学卒業

有名食品会社勤務

退社後3年程国内を流浪、多様な人と出会う。

28歳の時、先代社長の故作田良一とものつくりの夢を語り、窯を開く。

作ること、売ること基本を大切にすれば難しいことではありませんが、伝統産業界全般に云えることとして、原材料や道具の仕入れが困難になりつつあります。

県内の九谷焼業界において、原石の埋蔵量に対する懸念は少ないとしても、成形する前の杯土を造る事業所は2件とごくわずかです。

従業員は2件合わせて50歳代の方が3名です。後継者はおりません。

ここ数年間で、石川県内の釉薬屋は全て廃業しました。

石川県内の顔料屋もいつまで事業を継続できるか分かりません。

石川県内に絵筆屋はありません。

作ること、売ることばかりが目される傾向にあります。皆様には、業界の川上から川下までを総合的にご覧いただきたいと存じます。

7. 作成支援士業コメント

中小企業診断士 佐々木 経司

当社代表の秦氏は、作品の制作に重要な感性感覚だけでなく、伝統工芸品産業界の今後に必要な経営の感覚もバランスよく備えております。そしてそれらを実行するための仕組み～構造資産や関係資産～を構築してきました。①時代のトレンドをつかみ続けるため、従業員の平均年齢を30歳代前半に保っていること、②作家各人により統一感ある作品を創っていること(非分業体制)、③作家が多いため薄く広く粗利を稼ぐことができ、休業中の従業員の人件費を含めた固定費を賄うことができること、④しがらみにとらわれずに販路を選ぶことができること、⑤大学のゼミのような教育体制が整っていること。

代表の秦氏は自社の事だけでなく、産地全体にも目を向けております。特に注目度が低くなりがちな川上から川中までに対する関心は、人一倍です。秦氏の優れた経営感覚があるからこそこの点に注目していると考えられます。

当社は、作家を継続的に育成する構造資産は構築されておりますが、販売に関する構造資産は十分とは言えません。新陳代謝が比較的盛んな当社において、販売に関する構造資産を構築することが今後の課題と考えられます。また、川上事業者の窮地という外部環境により、本来の青みを帯びた土により製品を創ることが困難になっており、この点も今後の課題と考えられます。

行政書士

「温故知新と陶芸の基本を守り、これまでにない食器を創る。」

この理念を実践するため、最も重視されるのは、個々の陶工(人的資産)であることは言うまでもありません。古き良き作品に触れ、ただ新しいだけではない、これまでにない食器を生み出す原動力、一重に陶工(人的資産)の資質にかかっているからです。

一般に、事業を長期に亘り維持するためには、個々の人材が培ってきたノウハウを共有化、組織化することが有益と考えられます。しかし、陶工が変われば、同じ土、同じ工程で創った食器でも、全く異なる品となる中であって、個々の陶工(人的資産)が培ってきたノウハウ等を共有化、組織化すること(構造資産化)は困難であるだけでなく、九谷作田の理念と相容れないとも言っても過言ではないでしょう。そこで、事業を長期に亘り維持するため、人的資産の構造資産化という方法によらない、別の工夫が必要となります。

この点、九谷作田では、陶工(人的資産)の平均年齢を30歳代前半に保ち、新陳代謝を繰り返す工夫がなされております。これは、伝統工芸の業界では異色とも言えますが、九谷作田の理念にもっとも叶った方針といえます。また、一人の陶工が一貫して作品作りをする非分業体制を採っていることは、分業化体制が常識といえる業界にあって、興味深いだけではなく、若い陶工(人的資産)の能力を高めることに寄与する仕組み(構造資産)になっていると言えます。この工夫からも九谷作田が人的資産を如何に重視しているか知ることができます。

九谷焼業界を取り巻く環境が厳しいことは、代表者である秦氏のメッセージからも明らかですが、陶芸の基本を守る姿勢を保ち続けながら、常識にとらわれず果敢な取り組みをする九谷作田に期待いたします。

弁理士 横井 敏弘

株式会社九谷作田(以下「当社」)は、「九谷らしさ」を独自の視点でとらえ、これを継承し広めようとしております。当社の考える「九谷らしさ」は、例えば、原材料である「杯土」へのこだわりとなって現れています。また、「九谷らしさ」をしっかりと説明するために、対面販売を重視しています。

同時に、若手職人の育成と、若い感性の導入にも積極的に取り組んでいます。具体的には、職人それぞれの責任の下で少量多品種生産を行うことにより、世の中のニーズ(トレンドを含む)に合致した商品を広く探ると共に、さまざまな感性を取り入れた商品作りを実現しています。これは、チャレンジし成長する場を若手職人に提供することにもなっています。

今後は、代表者が有する販売ノウハウの社内共有と、当社の主張を発信するためのブランド戦略が必要になります。代表者の販売ノウハウを共有するための具体的な仕組みを検討すると共に、当社が考える「九谷らしさ」を当社のブランドイメージに紐づけていくための具体的な行動が必要であると考えます。

また、地域で伝承されてきた知的資産を守っていくための取組みにも期待しております。石川県内の釉薬屋や絵筆屋などが存在しなくなった現状において、業界の川上から川下までを巻き込んだ、皆が元気になれる連携事業が必要なのではないでしょうか。

8. 知的資産経営報告書とは

【意義】

「知的資産」とは、従来のバランスシートに記載されている資産以外の無形の資産であり、企業における競争力の源泉である人材、技術、技能、知的財産（特許・ブランドなど）、組織力、経営理念、顧客とネットワークなど、財務諸表には表れてこない、目に見えにくい経営資源、すなわち非財務情報を、債権者、株主、顧客、従業員といったステークホルダー（利害関係者）に対し、「知的資産」を活用した企業価値向上に向けた活動（価値創造戦略）として目に見える形で分かりやすく伝え、企業の将来に関する認識の共有化を図ることを目的に作成する書類です。経済産業省から平成17年10月に「知的資産経営の開示ガイドライン」が公表されており、本報告書は原則としてこれに準拠して作成いたしております。

知的資産のイメージ



【注意事項】

本知的資産経営報告書に掲載しております将来の経営戦略及び事業計画並びに附随する事業見込みなどは、すべて現在入手可能な情報をもとに、弊社の判断にて記載しております。そのため、将来に亘る弊社を取り巻く経営環境（内部環境及び外部環境）の変化によって、これらの記載する内容などを変更する必要を生じることもあり、その際には、本報告書の内容が将来実施又は実現する内容と異なる可能性もあります。よって、本報告書に記載した内容や数値などを、弊社が将来に亘って保証するものではないことを、充分にご了承願います。

この知的資産経営報告書は、石川県が株式会社迅技術経営に委託した石川県民間提案型継続雇用創出事業「伝統的工芸品産業事業者の魅力伝える知的資産経営作成事業」により作成いたしました。